



A KIYOSHI KUROSAWA FILM

カリスマ

CHARISMA

監督・脚本 黒沢清
1999年カンヌ国際映画祭正式出品作品

役所広司 池内博之 大杉 漣 洞口依子 風吹ジュン

製作:日活株式会社 キングレコード株式会社 東京テアトル株式会社 配給:日活株式会社 東京テアトル株式会社

Illustration: MAKOTO HOJA, courtesy of MIZUMA ART GALLERY CO. Ltd.
©1999 日活/キングレコード/東京テアトル

黒沢 清には、「廃屋をめぐる想像力」ともいうべきものが鈍くまわりついている。実際、初期の『ドレミファ娘の血が騒ぐ』から『Charisma』にいたるまで、彼の作品のいたるところに、無残に朽ちてた建物の内部空間がぼかりと口を拡げているのだ。そこでは、金属の建具はごとごとく腐蝕し、壁という壁には穴がうがたれ、コンクリートの床には水が黒々とたたえられてさえる。しかも、そのほとんどは、どこからでもロング・ショットが撮れるほど充分に広い。そんな空間が世紀末日本のどこに存在するのだろうかとか誰もが訝らずにはいられないのだが、あたかも黒沢の作品には必須の舞台装置だというかのように、その大袈裟な廃屋は肝心な瞬間にぬっと姿をみせ、人びとを惑わしにかかるとだ。

『Charisma』の冒頭、担当した事件で犯人と人質とをともに救えなかった刑事薮池（役所広司）は、上司から休暇を命じられ、思い立って都会を離れて、癒しを求めるかのように森へと足を踏み入れる。そんな失意の刑事がふと目にする木陰に放置された一台の自動車が、すでに廃屋の雰囲気を漂わせていることを見落とさずにおこう。彼の睡眠中に車には火が放たれ、あっさり炎上してしまうのだが、それが何もの仕業なのか、また自分が誰に救われたのかさえわからぬままに、刑事は植林作業員たちの木造の宿舎に身を寄せることになる。もちろん、この宿舎も、そんな廃屋の一つである。そこには、多くの作業員が宿泊しているはずなのに、窓ガラスはあらかじめ割れて風をさえぎることがなく、木材はささくれだって風化し、扉もまともに閉まりそうにはみえない。

彼が森をさまよううちに踏み感い、ホテルと間違えて疲労困憊したま眠り込み、見知らぬ青年から夜中に魂を抜かれそうになるのも、そんな廃屋にほかならない。それは、どうやら院長がすでに死亡している精神病院らしいのだが、こうした廃屋がかつていかなる空間として機能していたのか、本当のところは誰にもにもわからない。こうした一連の廃屋は、工場なのか、それとも倉庫だろうか。ことによると、学校の校舎か体育館だったのかもしれない。いずれにせよ、黒沢 清の作中人物たちが何かに憑かれたように踏みまどうことになる廃屋は、およそ時間の厚みというものを欠いたぶっさらばうな空間である。彼の映画に流れている時間は過去などをめざすはずもないので、その「廃屋をめぐる想像力」は、間違ってもロマンチックな思考を刺激する「廃墟」のイメージにおさまりはしないだろう。完成とも崩壊とも無縁にいきなり出現した純粋廃屋ともいうべき空間に足を踏み入れる男と女は、いずれもいつもとは違う自分に出会い、狂気にちかい体験をしがちなのである。

実際、かつての快適な居住空間が時とともに崩れおち、その遥かな残滓として「廃墟」がそこはかとなく郷愁を誘うといった瞬間は、黒沢 清の映画にはまったく描かれることがない。初めから終わりまでもっぱら廃屋としてあることを運命づけられた黒沢的な廃屋は、いささかも過去の記憶をまとうことなく、とりとめのない現在として、その暴力的な表情を視線にさらすことになるだろう。それは、カメラにおさまることで廃屋として生き始めようとする物質の悪意が跳梁する空間である。そこではいきなり日本刀が抜かれ、ハンマーが打ちおろされ、間違もなく殺人が起こる。い

『Charisma』または植物的な暴力について 蓮實重彦

かなる意図があつての殺人なのか、しかし、それは誰にも想像がつかない。

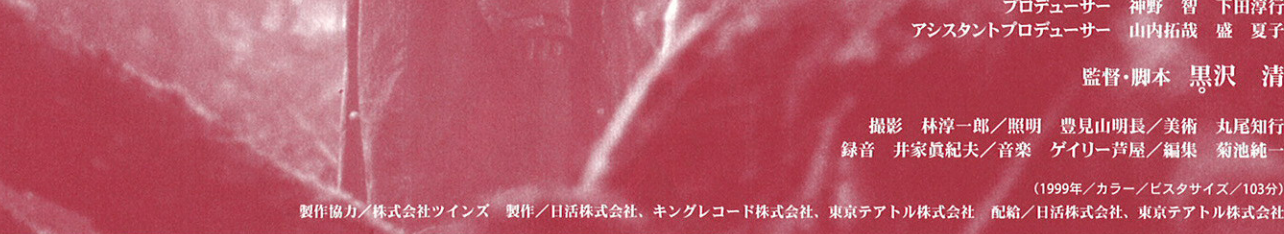
黒沢 清の作品は、『Charisma』がそうであるように、この不条理を空白の中心として形成されるいくえもの網状組織として、限りなく繁殖してゆく。彼が好んで描く廃屋は、そのどれもが暴力的な装置として見るものの感性を揺るがせるのだが、理不尽な暴力が炸裂するがゆえに、それが暴力的な装置だというのではない。真に暴力的なのは、そこで時間にさからう物質の悪意にみちた空間の表情そのものなのだ。しかも、その空間をまがしい色調に染めあげるのは、物質の悪意ばかりではない。『Charisma』がそれ以前の作品と異なっているのは、何よりもまず、「廃屋をめぐる想像力」の煽りたてる暴力の気配が、物質界を超えて植物界にまで拡がりだしていることにあるからだ。

上司からバッジと拳銃を返却せよと迫られてもあっさり無視する刑事の前で、植物は嘘のように物質を模倣し始める。まず、役所広司が友人の車で運ばれてくる森の入り口では、バスの駐車場の金属の時間表が、彼の視線を避けるかのように不意に道路に落ちて鈍い音を響かせる。あたかもその落下運動に伝染したかのように、森では、何本もの白い幹の木が、湿った音をたてて根こそぎ倒れてゆくだろう。そのとき、森林そのものが、悪意にさらされた廃屋へと変貌しつつあるのは誰の目にも明らかである。では、なぜ、植物は朽ちた物質空間としての廃屋を模倣しようとするのか。そこに目にもみえない二つの力が拮抗しあっているからだ。そうした闘争の中心に位置しているのが、カリスマと呼ばれる毒素を分泌する巨大な樹木なのだが、黒沢 清の傑作『Charisma』の主題ともいうべき「世界の法則」が発現することになるのは、その不可視の闘争を介してだろう。

自分が刑事であることをほとんど忘れ始めている刑事は、射殺される直前の若い犯人から、「世界の法則を回復せよ」という手書きのメッセージを受け取っている。だが、カリスマと呼ばれる毒素を含んだ樹木の不吉な効果で荒唐し、どこかしら廃屋に似はじめた森の中では、女性植物学者（風吹ジュン）も、衰えだしたカリスマの生育に賭ける孤独な青年（池内博之）も、その抗争の一方にしか加担しようとはしない。また、植林作業の監督や、ブランド・ハンターたちにとっては、闘争を回避することが目的となるだろう。森へと踏み感った刑事の薮池だけが、知らぬ間に闘争の何たるかを実践的に理解し始める。

『Charisma』の素晴らしさは、役所広司がたどる実践的な理解への行程が、哲学的な議論などとはいっさい無縁の暴力映画として描かれていることにある。森を救うか、カリスマを救うかという二者選択にあって、犯人と人質とをともに救おうとした過去のある彼には、二つの拮抗しあう力がせめぎあう場に身を置くことがどれほど苛酷な体験であるかをよく知っている。その点で、森と都会は、何ら変わるところのないまがまがしい廃屋なのだ。森にも住めず都会にも住めず、なおその双方で暮らさねばならないこの刑事らしからぬ刑事は、まさに二十世紀を真摯に生きようとするものの苛酷な生を、あの地面を引きずるような長いコートのごとくまとっているのである。

世界の法則を回復せよ



製作協力／株式会社ツインズ 製作／日活株式会社、キングレコード株式会社、東京テアトル株式会社 配給／日活株式会社、東京テアトル株式会社

20世紀の黙示録を示唆するべく未体験“NEOホラー”が誕生した!

神秘的な森を舞台に、共生・共存という人間の倫理問題、人間が意識下で求める本物の自由の形をテーマに描いた人間ドラマ『カリスマ』。

“**世界の法則を回復せよ**”という謎のメッセージを受け取った主人公の刑事・薮池五郎が、ふらりと訪れた森の中で出会った1本の木。この森は、この木の根から分泌される毒素により、壊滅の一途を辿っているという。生かすか、殺すか、いや共存はありえないのか?「あるがままにだ…」いつしかカリスマと同化した薮池が導く世界の法則とは…?

独特の語り口で終末を予感させる衝撃のラストまで観るものを引き込んで離さない。人間の奥に眠る本能を呼び覚まされているような、認識する間もなく陥れられる不安が全編に渦巻く未体験“NEOホラー”が誕生した!

’99年カンヌ国際映画祭に出品し、フランス先行ロードショーをはじめ、「カリスマ」は世界が絶賛!

1999年秋、パリをはじめフランスの各地で、黒沢 清監督作品が上映された。「CURE キュア」のフランス公開、黒沢作品特集上映、そして「カリスマ」の先行ロードショー（’99年12月8日封切）で華を飾る。

この秋のフェスティバルでの日本映画特集は、1996年の北野 武監督、1997年の大島 渚監督に次ぐ3人目。フランスでは、「クロサワ」といえばもちろん、故黒澤明監督を意味していたが、ここに来て“クロサワ”は、黒沢 清監督を意味するといっても過言ではなくなった。



2月26日(土)より“驚愕の”ロードショー!

特別鑑賞券 ¥1,500 (税込) 絶賛発売中!! 当日:一般 ¥1,800 (税込) 劇場窓口にてお買い求めいただいた方に特製ポストカードプレゼント! 初日舞台挨拶 (1回目上映終了後) 黒沢清監督・役所広司・池内博之・風吹ジュン・大杉 漣 (以上予定)



製作総指揮 中村雅哉 池口頌夫
企画 吉田 達 鶴野新一 有吉 司
プロデューサー 神野 智 下田淳行
アシスタントプロデューサー 山内拓哉 盛 夏子



1999年カンヌ国際映画祭 監督週間・プレス評

＜感動と官能＞

○彼の映画はフランシス・ベーコンの絵のようだ。登場人物の性格は計り知れず、物語は何通りにも解釈できる。美的表現は冷たく、かつ同時に感動と官能に溢れている。

○そろそろフランスももう一人のクロサワを発見してもいいころだ。

＜哲学の黒い木 寓話かホラー映画か、終末の悲劇を描く＞
○ジュール・ロマンは、田舎に対して“日中は退屈し、夜は恐ろしい”ところと表現している。黒沢清の描く田舎は決して退屈することはないが、夜も昼も恐ろしい。『カリスマ』は、カンヌ映画祭で紹介された映画の中で最も不安をかきたてる映画だ。

○近代映画には類を見ない終末前の時代を表す悪夢絵図である。

ジャン・フランソワ・ロジェ/ル・モンド紙 5月19日付

『カリスマ』ホームページ <http://www.nifty.com/charisma/>



新宿駅東口伊勢丹新館隣り tel.03-3352-1846
テアトル新宿
連日12:30 14:40 16:50 19:00

か細く見栄えのしない1本の木が金属パイプに支えられて立っている。

—これ、なに？

—木だよ。見りゃわかる。

—うん、そうだな。

映画のほうはそうは簡単にいきそうにない。この1本の木をめぐる物語であることはたしかなのだが、「これ、なに？」って「映画だよ。見りゃわかる」というほど一目瞭然ではなさそうだ。

じつはこの1本の木も「見りゃわかる」単なる木ではなく、みかけによらずしたたかな生命力を持っているばかりか、(1)だいいち「これ1本しかない」木なのであり、(2)「カリスマ」の名でよばれ、(3)その根から分泌する毒素が周囲の森全体を枯らしてしまうほど危険な「怪物」であるという正体が明かされ、やがて画面に暗雲垂れこめるがごときいきおいでグロテスクな巨大なハリボテのおかけ枯木に変身することになるだろう。それでも収集家にとっては1千万円の現金を投げだす価値のある「貴重な」木なのである。

この木をめぐるって、あるいはむしろ、この木のせいで、狂ったとか思えない人物が次々に、不意に、というよりもむしろ不意打ちのように現われてくるのだが、とこんなぐあいに物語は要約不可能なほど単純なようでもあるし、要約しようとするればするほど複雑にもなってくるものの、とにかく常軌を逸した人物たちの出現におどろくほかほかなく、それは日本刀を振り回して「カリスマ」を死守せんとするタートルネックのセーターを着た丸刈りの不機嫌な青年、池内博之であったり、聴診器と圧搾空気のポンペで「怪物」を退治して森全体を救おうとする愛想のいい鼻眼鏡美人の植物学者、風吹ジュンであったり、準備体操の好きな係官、大杉 漣の率いる冬ごもりのゲリラのような植林班だったり、「世界の法則」の回復を求めて長い裾をひきずらんばかりにだらしないヨレヨレのレインコートを着っぱなしで飢えてガツガツ何でも食べようとするタフなぐれ刑事、役所広司（流行の用語をまねてカリスマ刑事と言うべきか）であったり、白いふわふわとした縁取りのある真紅の毛皮のハーフコートがどことなく『間諜x27』（ジョゼフ・フォン・スタンバーグ監督、1931）のマレーネ・ディートリッヒの娼婦のコートとともに『気狂いピエロ』（ジャン・リュック・ゴダール監督、1965）のアンナ・カリーナの真っ赤なワンピースを想起させもする洞口依子のファム・ファタール、魔性の女（とでもとりあえず言うしかない奇妙な役だ）であったりする。

森のなかの俯瞰気味のロング・ショットで、洞口依子が役所広司の背中にまわりついてじゃれるようにとびかかっていくところなど、無邪気をよそおって男をひきとめ、つかまえようとする愛らしくユーモラスながら動物的な邪悪な決意を感じさせる。彼女が仕掛けたにちがいない罠（密猟者が動物をつかまえるときに使う本物の罠である）に役所広司は2度もひっかかる。いや、1度目は彼女の姉の風吹ジュンのほうが仕掛けたのかもしれない。だが、いずれにせよ、姉妹の、女たちの、奸計に陥るよりも、男は「平凡な」「あるがまま」の関係にもどらうとする。

問題は「特別な1本の木と森全体とどちらかしか生き残れないとしたら、どっちを選ぶ？」ということなのだが、

「最初から、結局、答はひとつだった」と役所広司は刑事らしく推理してみせる。「生きる力と殺す力は同じもの」である以上、「両方が生き残るしか道はないのだ」と。「両方が生きようとしているんだから、両方が生きればいい。それが、あるがままといいことだろう。もちろん、両方が殺し合えば全滅する。あるがままだ……」。

こうして、狂気と理性が、不条理と条理が、道連れになる。「あるがまま」とは平和共存の秩序ではないらしい。

さらに、「特別な1本の木も森全体もなかった」のであり、「ただ、あっちこっちに平凡な木が1本ずつ生えている。それだけだ」

と言ったとたんに、背後で、いきなり、1本の枯木が音を立てて倒れる。

突然何かが落っこちたり倒れたりするこわさがこの映画全篇にみなぎっているかのようだ。

「生かしてみたり、殺してみたり、あるがままだ」という「世界の法則」のこわさ。

「私には理解できません!」と洞口依子とともに叫ぶことも可能だし、ゆるされよう。「そろそろバカバカしくなってきたんじゃないですか」とまで彼女が言ってくれることに感謝することもできよう。

唐突に、なにげなく、俯瞰気味のロング・ショットでとらえられてはいるものの、人間を寝かせつけてその頭部をまるで餅つきでもするように、しかし音もなく、ハンマーで叩き潰す「処刑」のシーンに暴力という陳腐な表現を使っては間違ってしまうような気もする。恐怖と笑いが表裏一体になっているだけでなく、そこにはなにか妄想のようなものが感じられるからだ——映画とは組織や制度ではなく、燃え上がる欲望なのだという確信犯的妄想。

こともなげに日本刀を胸に突き刺し、背中を突き抜けても、魔術ショーのように血の一滴も出ないという胸のすくような不気味さ。

拳銃を奪われた刑事の役所広司に悪魔のような黒い影が忍び寄り、拳銃を返してやるかわりに「あなたの魂をもらおうぞ」と胸に手を入れて抜き取っていくところもある。

森の奥の廃屋と化した精神病院（だったにちがいない）も謎の空間だ——そこにも人が棲んでいるからである!。

一瞬先は闇ならぬ不測、不可知の暗黒の世界が待っているのである。

映画評論家 山田宏一

「最初から、結局、答はひとつだった」と役所広司は刑事らしく推理してみせる。「生きる力と殺す力は同じもの」である以上、「両方が生き残るしか道はないのだ」と。「両方が生きようとしているんだから、両方が生きればいい。それが、あるがままといいことだろう。もちろん、両方が殺し合えば全滅する。あるがままだ……」。

こうして、狂気と理性が、不条理と条理が、道連れになる。「あるがまま」とは平和共存の秩序ではないらしい。

さらに、「特別な1本の木も森全体もなかった」のであり、「ただ、あっちこっちに平凡な木が1本ずつ生えている。それだけだ」

と言ったとたんに、背後で、いきなり、1本の枯木が音を立てて倒れる。

突然何かが落っこちたり倒れたりするこわさがこの映画全篇にみなぎっているかのようだ。

「生かしてみたり、殺してみたり、あるがままだ」という「世界の法則」のこわさ。

「私には理解できません!」と洞口依子とともに叫ぶことも可能だし、ゆるされよう。「そろそろバカバカしくなってきたんじゃないですか」とまで彼女が言ってくれることに感謝することもできよう。

唐突に、なにげなく、俯瞰気味のロング・ショットでとらえられてはいるものの、人間を寝かせつけてその頭部をまるで餅つきでもするように、しかし音もなく、ハンマーで叩き潰す「処刑」のシーンに暴力という陳腐な表現を使っては間違ってしまうような気もする。恐怖と笑いが表裏一体になっているだけでなく、そこにはなにか妄想のようなものが感じられるからだ——映画とは組織や制度ではなく、燃え上がる欲望なのだという確信犯的妄想。

こともなげに日本刀を胸に突き刺し、背中を突き抜けても、魔術ショーのように血の一滴も出ないという胸のすくような不気味さ。

拳銃を奪われた刑事の役所広司に悪魔のような黒い影が忍び寄り、拳銃を返してやるかわりに「あなたの魂をもらおうぞ」と胸に手を入れて抜き取っていくところもある。

森の奥の廃屋と化した精神病院（だったにちがいない）も謎の空間だ——そこにも人が棲んでいるからである!。

一瞬先は闇ならぬ不測、不可知の暗黒の世界が待っているのである。

映画評論家 山田宏一

「最初から、結局、答はひとつだった」と役所広司は刑事らしく推理してみせる。「生きる力と殺す力は同じもの」である以上、「両方が生き残るしか道はないのだ」と。「両方が生きようとしているんだから、両方が生きればいい。それが、あるがままといいことだろう。もちろん、両方が殺し合えば全滅する。あるがままだ……」。

こうして、狂気と理性が、不条理と条理が、道連れになる。「あるがまま」とは平和共存の秩序ではないらしい。

さらに、「特別な1本の木も森全体もなかった」のであり、「ただ、あっちこっちに平凡な木が1本ずつ生えている。それだけだ」

と言ったとたんに、背後で、いきなり、1本の枯木が音を立てて倒れる。

突然何かが落っこちたり倒れたりするこわさがこの映画全篇にみなぎっているかのようだ。

「生かしてみたり、殺してみたり、あるがままだ」という「世界の法則」のこわさ。

「私には理解できません!」と洞口依子とともに叫ぶことも可能だし、ゆるされよう。「そろそろバカバカしくなってきたんじゃないですか」とまで彼女が言ってくれることに感謝することもできよう。

唐突に、なにげなく、俯瞰気味のロング・ショットでとらえられてはいるものの、人間を寝かせつけてその頭部をまるで餅つきでもするように、しかし音もなく、ハンマーで叩き潰す「処刑」のシーンに暴力という陳腐な表現を使っては間違ってしまうような気もする。恐怖と笑いが表裏一体になっているだけでなく、そこにはなにか妄想のようなものが感じられるからだ——映画とは組織や制度ではなく、燃え上がる欲望なのだという確信犯的妄想。

こともなげに日本刀を胸に突き刺し、背中を突き抜けても、魔術ショーのように血の一滴も出ないという胸のすくような不気味さ。

拳銃を奪われた刑事の役所広司に悪魔のような黒い影が忍び寄り、拳銃を返してやるかわりに「あなたの魂をもらおうぞ」と胸に手を入れて抜き取っていくところもある。

森の奥の廃屋と化した精神病院（だったにちがいない）も謎の空間だ——そこにも人が棲んでいるからである!。

一瞬先は闇ならぬ不測、不可知の暗黒の世界が待っているのである。

映画評論家 山田宏一

「最初から、結局、答はひとつだった」と役所広司は刑事らしく推理してみせる。「生きる力と殺す力は同じもの」である以上、「両方が生き残るしか道はないのだ」と。「両方が生きようとしているんだから、両方が生きればいい。それが、あるがままといいことだろう。もちろん、両方が殺し合えば全滅する。あるがままだ……」。

こうして、狂気と理性が、不条理と条理が、道連れになる。「あるがまま」とは平和共存の秩序ではないらしい。

さらに、「特別な1本の木も森全体もなかった」のであり、「ただ、あっちこっちに平凡な木が1本ずつ生えている。それだけだ」

と言ったとたんに、背後で、いきなり、1本の枯木が音を立てて倒れる。